

---

# ONE PIECE転生最強小説

多摩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ONE PIECE 転生最強小説

### 【Nコード】

N8325M

### 【作者名】

多摩

### 【あらすじ】

ある日、平凡な学生生活を送って居た主人公は学校帰りに子供が車に引かれそうになり子供の変わりに車に引かれて死んでしまった次に起きたら神様の夏舞に間違っで殺したのでチート能力を複数貰いワンピースの世界に転生させられてしまった！！

## プロローグ（前書き）

新しく訂正しました！！

## プロローグ

白い空間

『うう、此処は……』

「すみませんでした。」

『はい?』

『要するに、私は貴女の気紛れで死んだと言っ事ですか。』

「すみません、お詫びにチート特典と転生させます。」

『ちなみに、転生先は何処でしょうか?』

「ワンピースの主人公ルフィの実の兄に転生させます。」

『死亡フラグ満載じゃないですか。』

「なので、チート特典を複数くれる事にしました!!」

『分かった、転生します。』

「なら、欲しい能力を言っして下さい。」

『まず、一つ目Fateの無限の剣製的能力と英霊エミヤの弓矢と特殊技能のスキルを使える用にする事と二つ目私が知って居るゲームの魔法の全属性と創造魔法（魔力無限で）を使える用にする事と三つ目写輪眼・万華鏡写輪眼・白眼・直死の魔眼を合わせた目をデメリット無しで使える用にする事と四つ目身体能力を某史上最強の長老のレベルと超回復能力にする以上です。』

「分かりました。」

『もう、能力使えるのですか？』

「一応使えますが、転生してから使して下さい。後写輪眼・万華鏡写輪眼・白眼はチャクラの変わりに魔力で使える様にしました。」

『そうですか、ありがとうございます』

「では、転生させます。」

???は、光に包まれて消えた!!

## 主人公紹介（前書き）

連続投稿です。

## 主人公紹介

名前 モンキー・D・シズナ

身長 176cm

体重 58キロ

### 容姿

黒髪長髪で瞳の色も黒い色顔立ちはNARUTOの四代目火影のミナト似です。

### 性格

優しい・冷静沈着・おおらか・キレたら物凄く怖い

### チート能力

#### 一つ目

Fateの無限の剣製と英霊エミヤの弓矢の特殊技能スキル（真名解放も普通に使える）が使える。

#### 二つ目

シズナが、知って居るゲームの全属性の魔法と創造魔法を魔力無限で使える。

#### 三つ目

写輪眼・万華鏡写輪眼・白眼・直死の魔眼（もちろん、万華鏡写輪眼の特殊能力は全部使える）を合わせた目をデメリット無しで使える。

#### 四つ目

身体能力を某史上最強の長老レベルと超回復能力と霸王色の覇氣を  
使える様にする。

#### 設定

主人公のシズナは、平凡な学生生活を送って居たのだが学校帰りに  
子供が車に引かれそうになり子供をかばって車に引かれて死んで気  
付いたら白い空間で神様の夏舞にチート能力を複数貰いワンピース  
の主人公ルフィの兄に転生してしまった！！

#### 歳

21歳

#### 二つ名

森羅万象のシズナ

#### 理由

魔法や無限の剣製などを使う為！！



## 主人公紹介（後書き）

主人公の能力を少し変更しました！！

## 第一章（前書き）

少し変更して居ます!!

## 第一章

こんにちは、モンキー・D・シズナです。

私が、モンキー・D・ガープの孫として産まれて三年が経ちました。

そして、何故か……

『何処ですか、此処は……』

祖父ガープによりある孤島に居ました。

『フッフ、おじいちゃん帰って来たら覚えとけよ!!』

その時、ガープは背筋に悪寒を感じた。

『はあ、とにかく今日は食料を探しますか。』

シズナは、森に入って行き食べられる木の実と山菜と肉類（熊肉など）を探して回って居た。

三時間後

『ふう、これだけあれば当分は食料に困りませんね。』

シズナは、食料を探して居た時に見付けた洞穴に取って来た食料を置き夏舞から貰った能力を確認する為洞穴に結界を貼って海岸沿いに向かった。

『投影「トレース」開始「オン」停止解凍「フリーズアウト」全投影連続層写「ソードバレル・フルオープン」』

シズナは、頭上に投影した剣達を自分から離れた場所に向かわせ。

『壊れた幻想「ブローク・ファンタズム」』

剣達は、爆発した！！

『おお、やっぱりスゲエ破壊力だなあ。』

シズナは、今度は干将・莫耶を投影して干将・莫耶の感触を色々しながら確認していた！！

『ふう、そろそろ帰りますか。』

シズナは、洞穴に帰って居た。

## 第一章（後書き）

2、3話は、孤島での修業話を書きます!!

## 第二章（前書き）

眠い……

## 第二章

翌日、シズナは魔法と創造魔法を完璧に使える用にする為昨日行つた海岸沿いに向かった。

『さて、最初は何から使おうかなあ。』

シズナは、色々考えて最初に火の魔法の練習を始めた。

『蓮獄の始まりを告げる火炎龍よ我が敵を焼尽せ、プロミシア・プローション!!』

シズナが、唱えた火の上級魔法は海の水を少し蒸発させながら消えた。

『今度は、無詠唱でやってみるか。』

そして……

『プロミシア・プローション。』

先程と同じく海に向かって唱えたがやはり詠唱ありの方が威力は随分違った。シズナは、その後他の全属性の魔法の練習をして三時間後火・水・氷・土・風・雷の魔法を神級まで使える様になった。光・闇は最上級まで使える様になりシズナは、身体強化魔法の練習する為風・雷・光の強化魔法を体に付加させて六式の練習を始めた。

『刹・風雷光。嵐脚・風神。紙絵・風光。鉄塊・雷神。月歩・雷風。指銃・風雷神。六式奥義六王銃・光雷』

六式を身体強化魔法を付加しながら練習した結果シズナしか使えない六式・風雷光が出来た。

『いやさすが某史上最強の長老レベルの身体能力だなあ、この身体能力じゃなければ体が保つたなく死んで居たなあ。』

シズナは、少し休憩をして創造魔法の練習を始めた。

『さて、創造魔法確か夢に出て来た夏舞によると自分が知って居る物（例外もある）なら何でも創造出来るて夏舞が言ってたなあ。』

創造魔法を練習しようと思ったたら空が夕暮れだった為洞穴に帰る事にし明日創造魔法の練習と身体強化魔法を付加を使いながら感謝の正拳突き一万回をする事にして洞穴に帰って居た。



## 第二章（後書き）

次回の修業話で、もう一つ的能力に付いて書きます。

### 第三章（前書き）

修業編最終話です。

### 第三章

シズナが、ある孤島に来て三年が経ちシズナは、6歳になって居た。

『この孤島に来てあれから、三年になるのかそろそろおじいちゃんが迎えに来るなあ。』

シズナが、修業をしながらそんな事を考えて居た。

『今日は、オリジナル魔法の最終確認をしよう。』

シズナは、いつもの海岸沿いに向かいオリジナル魔法の最終確認を始めた。

『氷結の天帝よ、汝の敵に裁きをダイヤモンド・ダスト。』

海全体は、凍り付いた。

『次、龍神の怒りの龍炎を受けよドラゴン・プレス。』

凍り付いて居た海全体がドラゴン・プレスにより溶けて元の海に戻った。

『やっぱり、使えるなこれ。』

シズナは、先程使ったオリジナル魔法を絶賛していた。

『さて、この三年間色々な修業したお陰で霸王色の覇気を完璧に使える様になったし光・闇の魔法も神級まで使えるし六式も私専用を

使える様になったし感謝の正拳突き一万回をこの三年間ずっとやって居たお陰で百式観音が使える様になったし後無限の剣製や弓矢も完璧に使えるし海に出ても大将達と戦っても負ける事はないな。』

シズナは、最後の修業を終えていつもの洞穴に帰って居た。

### 第三章（後書き）

次は、フーシャ村に帰って来た話です。

## 第四章（前書き）

やっと、ルフィが登場した。しかも、女の子として……

## 第四章

シズナは祖父ガープが孤島に迎えに来て二週間後東の海の故郷フリーシャ村に着いた。

東の海へフリーシャ村

『おじいちゃん、早くルフィが見たいけど?』

「分かっておるわ。」

そう、シズナが孤島で修業して居る時に弟であるルフィが産まれて三年が経って居たのだ。それを知ったシズナはガープにO H A N A S Iをしてガープの部下から小さいながら怖がられた。

そんなこんなで、ルフィがもう3歳になる事した。

『で、ルフィは何処に居るのかなあ? (黒笑)』

「る、ルフィはマキノのお店に居るぞ。」

『分かった、ルフィお兄ちゃんが帰って来たよ。』

シズナは、そう言いながらルフィが居るマキノのお店に向かった。  
「やばい、シズナにルフィが女の子と言う事を言うの忘れたやばいやばいシズナに殺される。よし海軍本部に帰る」

ガープは、部下達を引き連れて海軍本部に帰って居た。後にシズナによって制裁を受けたのはほかでもなかった……

マキノのお店

「ねえ、マキノさん何か聞こえない？」

「うーん、言われてみれば。」

と、その時……

ドン

シズナは、お店のドアを開けて……

『ルフィ、お兄ちゃん帰って来たよ。』

「あら、シズナ君帰って来たの。」

『うん、つい先それよりおじいちゃんから此処にルフィが居るって聞いただけど?』

「居るわよ、ルフィ貴女のお兄ちゃんのシズナ君よ。」

マキノが、背後に居たルフィを前にだした。

『へ、もしかしてルフィか?』

「うん、そうだよシズナお兄ちゃん私はモンキー・D・ルフィだよ。」

『ルフィお前、女の子かあ。』



「うん、そうだよ。おじいちゃんから聞いてないの」

『うん、聞いてないな。（あの腐れ祖父がああ、次会ったらO S I O K Iしてやる。）』

その頃、ガープはまた背筋がゾツとした。

「もう、お爺ちゃんたら。」

『そうだな、駄目祖父だなあ。』

ガープよ、孫から駄目だしされて居るぞ。

シズナは、マキノのお店でルフィと孤島での修業の話をしてルフィと我が家に帰って居た。

## 第四章（後書き）

何か、シズナはエース（まだ出てないけど）と一緒にシスコンになりそうな予感がする。

## 第五章（前書き）

久しぶりの更新です。

## 第五章

シズナは、今エースが居るコルボ山に来て居た。

『エース居るかなあ？』

シズナは、エースが預けられて居る山賊ダダンの家前に来て居てシズナはドアをノックした。

コンコン

『すいません。』

ガツチャリ

「誰だいお前は？」

『私は、モンキー・D・ガープの孫のモンキー・D・シズナです。ダダンさん！！』

「ガープの孫だて、その孫が儂に何の用だい。」

『エースに会いに来たのですが、居ますか。』

「エースなら、此処じゃなくてグレイターミナルに居る筈だよ。」

『そうですか、ありがとうございます。』

シズナは、エースが居るグレイターミナルに向かった。



## 第五章（後書き）

次は、グレイターミナルでエースとサボに会います。

## 第六章（前書き）

少し長いです。

## 第六章

シズナは、エースとサボが居るグレイターミナルに着いた。

『さて、エースとサボは何処に居るかなあ。』

シズナは、歩きながら二人を探した

エース視点

俺は、産まれてからずっと山賊のダダンの所に厄介になって居た。  
俺には夢がある、親父であるゴールド・D・ロジャーの様な海賊になる事だ。

だから、俺はこのグレイターミナルで知り合ったサボと海賊になる  
為にお金を為たり（盗んだ物を売ったり）体を鍛えたりしている。

「なあ、サボ。」

「何、エース。」

「俺達どれくらい強くなったかなあ！！！」

「さあ、でもまだまだだと思っよ俺達。」

「だよなあ、早く強くなりたいなあ。」

『なら、私が強くしてあげるよ。』

エースとサボは、後を振り替えたらそこには黒髪黒目の少し女顔を  
した自分達と同じぐらいの子供が居た。



シズナ視点

グレイターミナルを歩いて三十分ぐらいようやくエースとサボの二人が海岸沿いに居て何かを話をして居た。

「なあ、サボ。」

「何、エース。」

「俺達どれぐらい強くなったかなあ――！」

私から見たら、エースとサボはまだ子供なのに少しぐらいは強いと思うが東の海に居るノコギリのアーロンやアルビダーやバギーにも勝ってないと思った。

「さあ、でもまだまだだと思うよ。」

「だよなあ、早く強くなりたいなあ。」

『なら、私が強くしてあげるよ。』

シズナは、エースとサボに声を掛けて姿を見せて出て来た。

シズナ視点終了

両視点

先に、シズナに声を掛けたのはサボだった。

「誰だお前？」

『私か、私はモンキー・D・シズナ。モンキー・D・ガープの孫だよ』

それを聞いたエースが……

「ジジイの孫が何しに来た。」

『いや、私は君に会いに来たんだよエース。』

「何で、俺に会いに来た。」

『いや、実は君達海賊になりたいだろう？』

「ああ、そうだ。」

『今の君達じゃあ、私には勝ってないよ。』

「「何だと／＼」」

エースとサボは、シズナの言葉を聞いてシズナに襲いかかった。

『甘い。』

シズナは、襲って来たエースとサボの腕を掴んで後に投げ付けた。エースとサボは、シズナに投げ付けられて気を失った。

『さて、二人をルフィの所に連れて行きますか。』

シズナは、ルフィが居る我が家に向かった。



## 第六章（後書き）

次は、エースとサボがルフィと会います。

## 第七章（前書き）

次の話から、エースとサボは主人公に鍛えて貰います。

## 第七章

シズナは、エースとサボを両脇に抱えてルフィが居る家に連れて居てルフィには事情を話して二人を見て貰って居る内にエースを自分と一緒に住む事をダダンさんに言いシズナは家に向かった。

『まだ、起きないのかぁ。』

シズナは、エースとサボが寝る部屋から出てルフィの所に向かった。

「あ、シズナお兄ちゃんあの二人は？」

『ああ、まだ眠って居る。それより夕飯は何？』

「うーん、今日はカレーライスだよ。」

『そうか。』

「じゃあ、出来たら呼ぶからねえ。」

『分かった。』

シズナは、テーブルがある所に向かった。

その時！！

ガッチャ

『おお、お二人さん起きたかぁ。』

「「ああ、お前は!!」」

「まあ、俺の事は後で教える。」

「「分かった。」」

ルフィが、台所から料理を運んで来た料理を食べる事にした。

## 第七章（後書き）

以外に、ネタを考えながら書くのは辛いよ。



## 第八章（前書き）

久し振りの更新です。

## 第八章

私は、今エースとサボとルフィに修業を科して居る。

『さて、エース・サボ・ルフィ私に攻撃して来て下さい。』

「攻撃ったて何でいきなりそんな事言うんだよ。」

「そうだぜえ。」

エースとサボが、シズナに言って来た。

『お前達には、今から私が使う二つの覇氣の一つは使える様にする。』

「二つの覇氣？」

ルフィの、疑問にシズナが答えた。

『まず、グランドラインと新世界と呼ばれる場所には見聞色の覇氣・武装色の覇氣と呼ばれる覇氣使いが居る。』

「見聞色の覇氣？」

「武装色の覇氣？」

『そうだ、ちなみにこの覇氣は素質が無ければ使えない。』

「そうなんだ。」

『まず、エース先程も言った様に私に攻撃して来なさい。』

「分かったよ。」

エースは渋々シズナの背後から左足をシズナに向かって蹴り上げた。

シズナは、目を瞑りこう言った。

『エースは、左から左足で攻撃する。』

シズナは、そう言ってエースの攻撃を避けた。

「……なあ！？」「」

三人は、シズナがエース攻撃を避けたのを驚いた様だ。

『とまあ、これが見聞色の覇気で先程エースが左足で俺に向かって蹴り上げたのを見聞色を使って攻撃を予知して避けたんだよじゃあ次行くか。』

「次は、確か武装色の覇気だよねえ。」

『そうだ、武装色の覇気を使うから海岸沿いに行くぞ。』

「何で、海岸沿いに行くんだよ。」

『武装色の覇気を、私が海王類に使って実戦で見せる為だよ。』

シズナが、そう言い歩いて海岸沿いに向かって行き三人もシズナの

後を付いて居た。

## 第八章（後書き）

今回は、ルフィとエースとサボに三種類の覇気の使い方を教える話です。

## 第九章（前書き）

更新です。



『どうだった、武装色の覇氣を見た感想は？』

「あれて、ジジイが俺を殴った時見たいな奴か？」

『おお、そうだ流石エースだなあ。』

「それにしても、凄い威力だなあ。」

『まあ、この武装色の覇氣を武器や先私や爺ちゃんが使って居た見たいに出来れば悪魔の実の能力者は溜まったもんじゃない。』

「てっことは、武装色の覇氣を使いこなせれば悪魔の実の能力者を倒せる様になるんだなあ。」

『まあな、だが先も言ったがそれぞれ得意不得意があるからそれぞれ得意な物を伸ばせば言いそれに体術や剣術なら私がこの島に居る間なら教えるよ。』

「ありがとう、シズナお兄ちゃん。」

そうして、三人はシズナの特訓を明日受ける為に家に帰って居た。



## 第九章（後書き）

次の話で、赤髪海賊団の皆さんが登場します。

## 第十章（前書き）

久し振りの更新です。

## 第十章

シズナによる修業から、4年が経った。

『よし、今日で私の修業は終わりだ。』

「ああ、キツかったぜえ。」

「シズナお兄ちゃん、スパルタだったからねえ。」

「でも、凄く強くなった事は確かだよ。」

そう、この4年シズナの修業を受けてルフィは六式の鉄塊と指銃と紙絵と剃の四式が使える様になったが月歩と嵐脚だけ後少しで使える様になる見たい？後3人はシズナから覇気の使い方も修業して貰って結果ルフィとエースが覇王色の覇気と武装色の覇気が得意見たいで見聞色の覇気は少し苦手見たいだった。サボは、覇王色の覇気を使えない代わりに武装色の覇気と見聞色の覇気が得意だった。

エースとサボは、ルフィと違って六式の鉄塊と指銃と紙絵と剃と月歩が使える。

サボはシズナから剣術も習って今では鉄を斬れる様になった。

『よし、そろそろ昼ご飯の時間だしマキノさんの店に行くぞ。』

シズナ達は、海岸沿いからマキノさんの店に向かって歩いて居た。

「ねえ、シズナお兄ちゃん。」

『何だどうした、ルフィ?』

「あちの方から、船が来るよ。」

『うっん?』

シズナは、ルフィに言われて船が来る方向を見た。

『あれは……（確かシャンクスの船かもうそんな時期かあ。）』

と、シズナはそう考えて居た。

『多分、あの船はこの島に来るから今はマキノさんの店で昼ご飯を食べるよ。』

「……分かった。」

4人は、マキノの店に 向かった。

## 第十章（後書き）

次の話で、シャunks達と会話します。

## 第十一章（前書き）

シャunksと会話しています。

## 第十一章

マキノさんのお店で、昼ご飯を食べて居たシズナ達の所にルフィが見た船に乗って居た人達がマキノさんのお店に入って来た。

「お邪魔するよ。」

と、そう言ったのは赤い髪で麦わら帽子を被った男の人だった。

「いらつしゃい、何にします。」

「あ、じゃあ肉とスパゲティと酒で後からまた一杯来るけど大丈夫かい。」

「ええ、大丈夫ですよ。」

マキノは、そう言って注文した物を準備し始めた。

「ん？」

男は、シズナ達に気付いた。

「お前達は、村の子かあ。」

『そうですけど、赤髪海賊船長の赤髪のシャンクスさん？』

シズナが、シャンクスにそう言ったら。

「俺を、知って居るのかあ。」

『ええ、私とこの子の祖父が英雄ガープですから。』

「何！？英雄ガープの孫だつて。」

シャンクスは、シズナのその言葉に驚いた。それから、シャンクスや後から来たシャンクスの部下の人達とも話をした。

「へえ、シャンクスさん達はそんな航海をなさつて居るんですね。」

「ああ、海は良いぞ冒険をしたりお宝を探したりをするからなあ。」

「ねえ、シズナお兄ちゃん私も１７歳になったら海に出て良い。」

『ああ、それは良いぞルフィの人生何だからなあ。』

「ありがとう、シズナお兄ちゃん。」

そんな、兄妹の話を聞いて居たシャンクスは……

「おいおい、いくら何でも女の子が海に出る事はないじゃないか。」

シャンクスが、そう言うところルフィが少しむうとしてシャンクスに文句を言った。

「何ですか、私が女の子だからと言う理由で海に出ちゃ行けないでシャンクスさんが決める事じゃないですかそれに私そこに居るサボ兄さんやエース兄さんもシズナお兄ちゃんから修業して貰って強いんですから。」



そんなルフィの、言葉にサンクスは……

「そうだな、すまなかった。」

と、ルフィに謝った。

「過ぎた事は、もう良いですよ。」

ルフィが、そう言ってサンクスに言った。

まあ、何とかルフィとサンクスが仲直りして少し経った時ガッタンと扉が開く音が聞こえたと思ったら山賊達が入って来た。

その中から、リーダーのヒグマがカウンターに近付きマキノに喋り掛けた。

「よう、酒ねえのか。」

「申し訳ありません、もうお酒無いんです。」

「何だと！？ふざけじゃねえ。」

ヒグマは、そう言ってマキノの胸倉を掴もうとした時……

ヒュッザクッ

何かが、ヒグマの腕に刺さった。

「グッ、誰だ俺にナイフを投げた奴は！？」

「私ですが、何かお兄さん？」

「あゝ ああ、俺が誰か分かってのかあ。」

「そうだぞ、お頭は賞金額800万ベリー何だぞ。」

「へえ、高が800万ベリーですか。」

「高が800万ベリーだと、ぶっ殺すぞ小僧。」

「ぶっ殺されたいのは、あんた達だ。」

シズナは、そう言つてヒグマ以外の山賊達を霸王色の覇氣を使って強制的に氣絶させた。

それを見たシャンクス達は、驚いた。

「な！？（あれは、霸王色の覇氣何故シズナが使える。それにそれを使った時ルフィやこの子達は何故平然としているんだ……。）」

と、シャンクスは混乱しながらも考えた。

「小僧、貴様何をした。」

「アンタに、言う事じゃない。」

「どう言つ意味だ。」

「何故なら、アンタは此処で私に殴られて氣絶するからだよ。」

シズナは、そう言って拳に武装色の覇気を纏わせてヒグマのお腹に掛けて思い切り殴った。

「グッ!？」

ドサッ

ヒグマは、倒れた。

「さて、マキノさんこの人達何処かに捨てて来ますね。」

シズナは、そう言って山賊達とヒグマを引きずって何処かに連れて居た。

「シズナ、強いな!!」

シャンクスが、そう呟いた。

## 第十一章（後書き）

エースとサボとその他の人達の会話を書くの忘れた！！

## 第十二章（前書き）

あの、シャunksが麦わら帽子をルフィに貸す話を書きました。

## 第十二章

シズナが、山賊達を何処かに連れて居た後ルフィが間違つて悪魔の実を食べてしまった<sup>リーダーのヒグマ</sup>り山賊達が懲りずに来てルフィを人質にとつてはシズナとサボとエースとシャンクス達に返り討ちに合つて大変だった。

そして今は、シャンクス達が村を離れて出航しようとしている。

「シャンクスさん、また会えるよね。」

「ああ、いつかルフィが海に出た時になあ。」

「まあ、その時会うまでこの麦わら帽子をお前に預けとくよ。」

シャンクスは、そう言つてルフィの頭に自分が被つて居た麦わら帽子を被せた。

「え、良いの？この麦わら帽子大切な物じゃないの。」

「大切な物だが、ルフィお前が仲間と一緒に旅をして俺達と会つた時その麦わら帽子を返せば良い。」

「うん、分かった。」

『じゃあルフィ、シャンクス達が行ったら悪魔の実の能力の使い方の練習するぞ。』

「分かった。」

そして、シャunks達は船に乗り出航した。

## 第十二章（後書き）

次の話で、シズナは旅に出ます！！



## 第十三章（前書き）

旅の始まりの話です。

## 第十三章

シャンクスが、フーシャ村を出てあれから7年が経った。

シズナは、17歳になり旅経つ日が来た。

### 旅経つ日の前日

シズナは、港から離れた場所海岸沿いに来て居た。

『ふうさて、やりますか。』

シズナは、呪文を唱えた。

『我、創造を司る者なり創造魔法：大船召喚！！』

シズナが、そう唱えたら海に大船が現われた。

『さて、今日は私の旅立つ日の前だからルフィがご馳走を作ってくれて居る筈だし家に帰るかあ。』

シズナは、海岸沿いから家に帰って居た。

家に着いたシズナは、ルフィとエースとサボに迎えられた。

「いよいよ、明日だねえ。」

『ああ、そうだ。』

「シズナ海岸沿いに何しに行ったんだ？」

と、エースがシズナに聞いた。

『大船を、私の能力で海に出して来たんだ。』

「ああ、例の創造魔法だけサボの誕生日にくれた刀を出したみたい  
に。」

『ああ、そうだ。』

「相変わらずシズナは、凄いな。」

「そうだね。」

『凄くはない、私より元凄い奴や強い奴だて居るんだから。』

「まあなあ。」

そんなこんなで、シズナが旅経つ前のお祝いも終り皆明日シズナを  
見送る為に寝る事にした。

翌朝

朝5時45分

シズナとエースとサボとルフィは、シズナが創造魔法で出した大船の所に来て居た。

『さて、私はそろそろ行くよ。』

「ああ、一年後俺とサボも海に出るから何処かで会おう。」

『ああ、そうだなその間鍛練を休むなよ。』

「分かってるよ。」

『サボ、エースと会いに来るの楽しみに待って居るからなあ。』

「ああ、もっと強くなって会いに行くよ。」

『ルフィ、お前も後4年後に旅経つ日が来るだろう。もし会ったらどれくらい強くなったか見せて貰うからな。』

「うん、分かったよシズナお兄ちゃん。」

シズナは、ルフィにそう言って大船に乗り込んだ。

『それじゃあ、私はもう行くけどいつか待った会おう。』

「「「また、会う日まで!」」」」

シズナの大船は動き出して段々フーシャ村が見えなくなった。

『さあ、私の旅が始まった。』

これから、シズナとこれから会っだろう仲間達との冒険の旅が始まった！！

## 第十三章（後書き）

次の話で、シズナの友達が同じく転生して居て仲間になる話です。

## 第十四章（前書き）

少し長いと、思います!!

## 第十四章

シズナが、フーシャ村から出て4日経ちやっとシズナは島を発見した。

『ふう、やっと島が見つかったしかも原作でルフィがゾロと会い後  
その海軍本部のモーガン大佐を倒したシエルズタウンか。』

シズナが、そんな事を考えて居たら大船が島の船付場についてシズナは大船から錨を海に落として島に上陸した。

シズナは、島に上陸してまず食材と生活用品の補充した物を買って誰も居ない裏道で買った物を空間魔法に入れて夜に眠って居た時夢に神様の夏舞から自分の友人が同じくワンピースの世界に転生して居てその友人の二人がこの島の食堂に居ると夏舞から聞いてシズナはこの島で大きな食堂に向かった。

シズナ視点終了



?? & amp ;?? 視点

やあ、こんにちは俺はキンミヤ・ヒジリだ。それでこちらが僕はナヤマ・シンです。俺／僕は神様の夏舞と言う人からこのワンピースの世界に親友のシズナが転生したと聞いてしかもチート能力を複数貰ったと聞いて自分達もチート能力を複数貰い転生した。そして、俺とシンは夏舞からシズナがこのシエルズタウンに来る事を教えて貰ってこの島で大きい食堂で待つて居る事にした。

「なあ、シン。」

「何です、ヒジリ。」

「シズナは、何処に転生したんだろう？」

「さあ、僕には検討が付きません。」

「そうだな。」

二人が、そんな会話をして居た時食堂のドアが開いた。

二人の視点終了

### 第三者視点

シズナは、食堂の前についてお店の中に入る事にしお店のドアを開けて入った。

カランカラン

「いらつしゃい。」

『此処に、蒼色の髪に翡翠色の瞳に後黒色と白色の双剣を持った奴と金髪に紫色の瞳をした二人組が此処に居ると聞いたんだが？』

「ああ、ヒジリさんとシン君なら二階に居ますよ。」

『そうですか、後チャーハンと焼肉を注文お願いしても良いですか？』

「良いですよ、料理が出来たら二階に持って来ます。」

『そうですか、ありがとうございます。』

シズナは、そう言って二階に居る親友に会いに行った。

「あれ？」

「どうした、シン。」

「誰か、こちらに來ますよ。」

「多分、シズナだな。」

「ああ、確かにシズナの氣配ですねこれは。」

ヒジリとシンが、喋って居たらシズナが二人の所に來た。

『ヒジリとシンかあ？』

「久し振り、シズナ。」

「お久しぶりですね、シズナ。」

『ああ、そうだな。』

シズナは、二人が居る席の椅子に座った。

「そう言えばシズナは、何処に転生したんですか。」

『私か？私は、モンキー・D・ガープの孫に産まれて主人公のルフィの兄に転生していた。』

「マジで、ガープの孫に産まれたのかあ。」

『ああ、しかもルフィが女の子だったからびっくりした。』

「マジですか!？」

『ああ、マジだ。私の話は終わった次はお前らの話を聞かせろ。』

「そうだな、俺は北の海のとある島の村に産まれて旅に出るまであの神様の夏舞から貰ったチート能力の使い方の練習をしていた。」

「僕は、西の海のとある島でヒジリと同じく産まれてチート能力の使い方の練習をして居ました。」

『そう言えば、お前達のチート能力で何だ。』

「俺のチート能力は、一つ目が、悪魔の実の超人系のコトコトの実で二つ目が白髭海賊団の花剣のビスタの剣術のレベルの身体能力にする事と三つ目最上大業物でこの双剣を作って貰って四つ目が写輪眼をチャクラ無しでしかも万華鏡写輪眼もデメリット無しで技使い放題にして貰った。」

『そうか後、そのコトコトの実でどう言う能力何だ。』

「ああ、コトコトの実は言葉の通りその言霊つまり誰かの技名や悪魔の実の名前なら自然系の名前を言えば自然系の技も使えるがデメリットで一度解除すると約半日間悪魔の実の能力が消えるだわ。」

『と言う事は、半日間そのコトコトの実が使えないから海に落ちても大丈夫な訳かあ。』

「まあ、そう言う事だ。」

『そうか、なら次はシンの能力を教えてください。』

「そうですね、僕のチート能力は一つ目自然系悪魔の実ヒエヒエの実モデルぶぶぶの実つまり吹雪人間と二つ目NARUTOの医療忍術・忍術・幻術・体術が使える事と三つ目チャクラをナルトの約20倍や四つ目海軍中将英雄ガープの身体能力にする事です。」

『そうかなら、次は私だな。』

「シズナは、どんなチート能力を複数貰ったんですか。」

『私のチート能力は、一つ目ゲームと漫画と携帯小説で書かれて居る魔法と創造魔法を全属性の技を全部使える様にする事と二つ目魔力無限で三つ目写輪眼・万華鏡写輪眼・白眼・直死の魔眼を合わせた目をデメリット無しで使える様にする事と四つ目容姿をNARUTOの四代目火影ミナトの幼少時代の容姿にする事と五つ目某史上最強の長老レベルの身体能力と超回復能力にする事が私が夏舞に貰ったチート能力だ。』

「「ただ、最強だよ/ですか。」」

『まあだから、一番目のチート能力で某正義の味方の能力と弓の力も普通に使える訳よ。』

「やっぱりシズナは、規格外ですね。」

『まあ自分でも、分かって居るさあ。』

そんな話をして居たらシズナが注文をしていた料理が運ばれて来た。

『まあ、これを食べたら此処から出るよ。』

「分かった。」

シズナは、料理を全部食べ終わり勘定を済ませてシン・ヒジリと大船を停めてある船着き場に行き大船に乗り込んで錨を上げて船を動かしてシエルズタウンから就航した。

## 第十四章（後書き）

次は、ヒジリとシンの紹介です。

## キャラ紹介1（前書き）

ヒジリとシンの、ステータスを書きました！！



## キャラ紹介1

名前 キンミヤ・ヒジリ

身長 178cm

体重 65キロ

容姿

蒼色の短髪で、瞳の色は翡翠色で顔立ちは某史上最強の谷本夏似です。

性格

優しい・運動神経抜群・冷静沈着・キレたら物凄く怖い（BASSA RAの小十郎の極殺モード見たいな感じ）など

武器

最上大業物：黒蘭・白蘭

チート能力

一つ目悪魔の実超人系コトコトの実（名前の通り他人の悪魔の実の能力（自然系も含まれる）や技などが使えるが一度解除すると約半日間はその能力が使えなくなるデメリットが発生する。二つ目白髭海賊団花剣のビスタの剣術のレベルの身体能力にする。三つ目武器を双剣にしてそれを最上大業物の二つにする。四つ目写輪眼と万華鏡写輪眼をチャクラ無しと写輪眼・万華鏡写輪眼の技をデメリット無しで使い放題にする。

## 設定

主人公シズナの親友で、同じく神様の夏舞によってワンピースの世界に転生してもう一人の親友のシンと一緒にシェルズタウンに行きシズナと会い一緒に旅をする事にした。

## 二つ名

魔眼双剣のヒジリ

## 理由

写輪眼と双剣を使う為！！

名前 ナヤマ・シン

身長 171cm

体重 56キロ

## 容姿

金髪の少し長くて、瞳の色は紫色で顔立ちは某正義の味方のエミヤ・シロウ似です。

## 性格

腹黒い・優しい・頭脳明晰・運動神経抜群・冷静沈着など

## チート能力

一つ目悪魔の実自然系ヒエヒエの実モデルふぶふぶの実（つまり吹雪人間です。）二つ目NARUTOの医療忍術・忍術・幻術・体術・仙術が使える。三つ目チャクラをナルトの約20倍にする。四つ目身体能力を英雄ガープの全盛期並にする。

武器

籠手

設定

同じく、主人公のシズナと親友ヒジリと同じくワンピースの世界に転生してヒジリとシエルズタウンで会いまたシズナとも会って一緒に旅をする事にした。

二つ名

雪鬼神のシン

理由

ふぶふぶの実と怪力と武装色の覇気を籠手と背後に纏わせて敵を殲滅するから。

二人共、霸王色の覇気は、使えない代わりに武装色の覇気と見聞色の覇気を得意としています。

## キャラ紹介1（後書き）

次は、三人が今後どうするかを決めます!!

## 第十五章（前書き）

今回は、船での役割の話です。

## 第十五章

シエルズタウンから、出たシズナ達は今後の事とこの船での役割を決める事にした。

『さて、まず今後の事だが海賊になるか・賞金稼ぎになるかだ。』

「そうだな、最初は賞金稼ぎをして仲間が集まってからでも海賊になるのは遅くないだろう。」

「確かに、最初に賞金稼ぎをしてお金を稼いどかないと今後が大変になりますからね。」

『分かった、最初は賞金稼ぎをしてグランドラインで少し時間が経ってから海賊になりますか。』

「それで、決まりだな。」

「なら、次はこの船での役割を決めましょう。」

『まず、私は船長兼臨時船医をする事は決定だなあ。』

「船長は、分かるが何で臨時船医もやるんだ？」

と、ヒジリが聞いた。

『まず、この船で医療系が出来るのは私とシンだけだからだ。』

「なるほど確かに、お前とシンは回復魔法と医療忍術が使えるから

なあ。」

『そう言う事で、ヒジリお前は副船長兼臨時航海士だ。』

「分かったよ。」

「なら、僕は船医だね。」

『ああ、戦闘員はこの船に乗る全員だからなあ。』

「分かった。」

「なら、今必要の人は航海士とコックと船大工だねえ。」

『ああまず、航海士とコックが先に仲間になりたいなあ。』

「そうだな。」

そんなこんなで、話をして空が暗くなり夕飯の時間になりシズナ達は船の中に入ってシズナはキッチンで夕飯を作ってヒジリとシンと一緒に夕飯を食べて交代をしながら先に寝る事にし寝室に向かった。

## 第十五章（後書き）

すいません、海上レストランバリエに主人公達行くと書きましたが他の場所でコックのオリキャラを出したいと思います。



## 第十六章（前書き）

シズナ達の賞金稼ぎでの最初に討伐する奴の話を書きました！！

## 第十六章

翌朝、シズナ・ヒジリ・シンは東の海に居るモブ海賊だけを捕まえる事にした。

『まあ、4年も経ったら原作開始でルフィが海に出るからなアーロンやクリークやバギーやクロなどの海賊は捕まえるのは無しなあ。』

「分かった。」

「なら、この近くにスコール海賊団が居た筈だよ。」

『何だ、スコール海賊団であめでも降して攻撃でもする気かあ？』

「まあなあ、確かスコール海賊団の船長が悪魔の実自然系ミスミズの能力モデルあめあめで船長の二つ名が大雨のジェイで海賊団の名前がスコール海賊団だった筈で賞金額が2500万ベリーだった筈……。」

『賞金額2500万ベリーかよし、最初の私達の海賊討伐記念はそ  
のスコール海賊団に決定だなあ。』

「なら、スコール海賊団の拠点のアビリカ島に向かうよ。」

シズナ達が乗る船はスコール海賊団が居るアビリカ島に向かって発進した。

## 第十六章（後書き）

次の話で、戦闘が行なわれます。

## 第十七章（前書き）

三人共戦闘をして居ます！！

## 第十七章

二日後、シズナ・ヒジリ・シンはスコール海賊団が居るアビリカ島に着いた。

『さて、最初に雑魚は私が霸王色で強制的に気絶させるとして幹部クラスは残すからどうやって倒すか決めよ。』

「じゃあ僕は、拳と足にチャクラと武装色の覇気を纏わせてからNARUTOの綱手姫見たいにするよ。」

と、シンは体術だけを使い悪魔の実を使わない事にした。

「じゃあ、俺はコトコトの実を使う事にして今回は剣術は使わない。」

ヒジリは、剣術は使わなくコトコトの実つまり悪魔の実を使う事にした。

『なら、私は六式の属性付加Ver・じゃなくて普通の六式と武装色の覇気だけを使うよ。』

「それじゃあ、上陸しよう。」

「そうだな。」

シズナ・ヒジリ・シンは、アビリカ島に上陸した。

?? 視点

ギヤハ八俺は、スコール海賊団船長大雨のジエイだ。俺達はこの島を拠点にして住んで居た村人達から月に一回にお金か金品を徴収して居るそれが何故かは俺達は村人の苦しむ顔が大好きだからお金が払えない奴はみし占めに村人全員を集めて公開処刑をしたりしている。

「さて、今日は何をしようか。」

と、俺が何気に呟いて居た時俺の右腕のクルスと参謀のリーエイが慌てて俺の方に来た。

「た、大変だジエイ!!」

「どうした、クルス・リーエイ何か合ったかあ？」

「海岸を警備していた部下達がある大船に乗って来た三人組に殺られた見たいだ。」

「それにそいつら、自分から賞金稼ぎて名乗りやがった。」

「何!？」

「どうする、ジェイ奴等が此処に来るのも時間の問題だ。」

「クルス。」

「何だ、ジェイ。」

「そいつら、三人組と言ったな。」

「ああ。」

「なら、リーダー格は此処に通せ俺が相手をするから残り二人は貴様らで相手をしろ。」

「分かった。」

ドン！！

と、喋って居たら崩壊した壁から三人組の男が出て来た。

ジェイ視点終了

### 第三者視点

シズナ・ヒジリ・シンは、目の前に座って居る奴とその座って居る奴の側に居る奴にシズナが喋り掛けた。

『大雨のジェイは、誰だ。』

「貴様らか、俺の部下を殺したのは!!」

「はあ? お前の部下は殺してねよ強制的に気絶させて居るだけだ。」

「そんな事は、どうでも良いお前達は何しに来た。」

『私達は、貴女達を捕まえに来たんですよ。』

「お前達、海軍か。」

「俺達は、海軍じゃねえ賞金稼ぎだ。」

「俺達を、捕まえるなら捕まえてみる。」

と、大雨のジェイがそう言いジェイの部下のジェイとクルスとリーエイはシズナ達に襲いかかった。

『二人共、気を付けろよ。』

「そちらこそ。」

シズナは、大雨のジェイとヒジリはクルスとシンはリーエイと戦闘



を開始した。

リーエイとシン視点

「まず、俺の自己紹介から俺は毒槍のリーエイだ。」

「僕は、ナヤマ・シンです。」

「フン、ナヤマ・シンが良い名前だ。だが俺は捕まらんぞ!!」

リーエイは、シンに向かって武器の毒槍を使って攻撃を仕掛けたが

……

「遅いわ!!」

シンは、拳に付けて居た籠手にチャクラと武装色の覇気を纏わせて瞬身でリーエイの懐に潜り拳をリーエイの腹にめり込ませた。

「グッ!!」

ドサッ

「ふう、少し手加減してもやっぱりグランドラインじゃないから弱いな。」

シンは、そう呟いてリーエイが目覚めない様に幻術を掛けてロープで縛り付けてそれを背負ってヒジリの所に向かった。

ヒジリ・クルス視点

「で、あんたの二つ名何て言うだ？」

「俺は、猛猿のクルスと呼ばれて居る。」

「あんたも、悪魔の実の能力者か。」

「ああ、そうだ俺は動物系悪魔の実サルサルの実モデルゴリラ人間だ。」

「そうかい、俺はコトコトの実の能力者だ。」

「なら、勝負だ。」

クルスは第一形態のゴリラの姿になりヒジリに向かって拳を振り上

げたがヒジリはそれを軽やかに避けてコトコトの実の能力でゴムゴムの実つまりルフィ技にし。

「ゴムゴムの散弾。<sup>フレット</sup>」

ドン

クルスの腹に原作のルフィが放った散弾<sup>フレット</sup>よりも威力は半端なかった。

「……………」

ドサッ

クルスは、呻き声をあげず倒れた。

「あ、疲れた。」

ヒジリはコトコトの実の力を解除してクルスをシズナが創造魔法で作った海楼石が含まれた鎖をクルスに巻き付けてそれに鍵を掛けクルスを背負ってシンと合流してシズナの所に二人は向かった。

シズナ・ジェイ視点

「食らえ、レインソード。」

シズナ・ジェイは、シンとヒジリが戦う前から戦って居た。

『剃、指銃・零！…！』

ガキッ

「チッ、やるな小僧。」

『まあね、ただこれで終わりだよ嵐脚！！』

ザッ！！

「グッ、ギャアア腕があああああ！！」

『五月蠅い、まわれそして墜ちろ。』

シズナは、ジエイに紅月眼で幻術を掛けてヒジリに渡した海楼石が含まれた鎖をジエイに巻き付けて鍵を掛けてヒジリとシンが来るのを待った。

### 第三者視点

『お、来た来た。』

「どうだった？」

『余裕余裕、そちらさんは？』

「こちも、余裕だったぜ。」

『そうか。』

「なら、早くこいつら大船にある牢屋に入れよぜ。」

『そうだな。』

シズナ・ヒジリ・シンは、ジェイとクルスとリーエイを大船の牢屋に入れてアビリカ島から出よとした時に此処の村長からお礼に少しの金品と食料を貰ってシズナ達はアビリカ島から出た。

## 第十七章（後書き）

次の話は、オリキャラのコックを出したいと思います!!

## 第十八章（前書き）

オリキャラロックとの出会い前半です。

## 第十八章

アビリカ島を出航して、四日経ってシズナ達は倒したジェイとクルスとリーエイを海軍支部に引き渡す為に島を探して居た。

『はあ、コックが欲しいな。』

「そうですね。」

「確か、地図に……………」

ヒジリは、地図を観始めて……

「あ、此处だ。」

『何が、此处何です。』

「あの、海賊王ゴールド・D・ロジャーの船に乗って居たと言う伝説のコックがメリエル島と言う場所に居ると噂で聞きました。」

『マジで！？』

「はい。」

「確か、そこにも海軍支部が合つたはず……………」

『なら、丁度良いなあ船の牢屋に入れて居るあいつら海軍支部に引き渡せば良いし。』



「そうだな、ならメリエル島に向かうぜ。」

シズナ達は、メリエル島に向かった。

二日後、シズナ達はメリエル島に着き最初に海軍支部に向かいスコール海賊団の船長と副船長と幹部を引き渡して4500ベリーを貰いゴールド・D・ロジャーの元コックを探し始めた。

色々島の人達に聞き込みこの町の裏にシズナ達を探して居た伝説のコックが居ると聞いてシズナ達はそこに向かった。

フェイの食堂

『此処か。』

「そうみたいだね。」

「お店の中に入ろうぜ。」

シズナ達はお店に入るとしたその時……

「この、馬鹿弟子が!!」

「うわああああ。」

『どわあああ。』

「「シズナ!!」」

『……………。』

「……………」

シズナと投げられた少年は気絶した。

後半に続く。

## 第十八章（後書き）

次の話で、オリキャラがシズナ達と会話します。

## 第十九章（前書き）

オリキャラの話後編です。

## 第十九章

『うう、知らない天井だ。』

シズナはベッドから上半身だけ起き上がらせて辺りを見渡して居たらドアが開き誰かが来た。

「シズナ、気が付いたんだ。」

『ヒジリか、此処は何処だ？』

「ほら、俺達フエイさんを探して居てフエイさんのお店に入るとした時フエイさんが弟子を投げた時お前がお店のドアを開けた時一緒にぶつかって一緒に気絶して俺とシンの声がフエイさんに聞こえてフエイさんがお店の二階にある自室のベッドにお前と弟子のリエルを寝かせて俺とシンで此処に来た理由をフエイさんに話した。」

『で、結果は？』

「駄目だった。」

『そりゃあそうだ。』

「何とか、頼んで居た時リエルが起きて来てフエイさんに自分をこの人達と行きたいと言ったらフエイさんがキレて今リエルと大喧嘩中だ。」

『そうか、そう言えばシンは？』

「あいつなら、町で医学書を買いに居たぜ。」

『そうか。』

と、また部屋に誰が入って来た。

「お、元気になった見たいだな。」

『貴方が、フエイさんですか。』

「そうだぜ、英雄ガープの孫さん。」

『何故それを……。』

「ああ、その事がガープが2、4日前に此処に来て君と妹さんの事を話しに来て居たよ。」

『そうですか、あのゴールド・D・ロジャーに息子が居るのしていますか。』

「ああ、知って居るよ確か名前はエースだけ……………」

『多分、来年には海に出ると思いますよ。』

「何故、それを……………」

『エースは、私の義弟です。』

「そうかい……………」

『あの、此処に居るヒジリからも聞いたと思いますが私の船のコックになって貰えないでしょうか。』

「俺は、もう海には出ない此処で普通に暮らしたいからね。」

と、フェイがシズナにそう言った時……

「師匠、僕この人達と海に出たいです。」

「何、馬鹿な事を言ってるお前はまだまだ弱いじゃないか。」

「…………でも。」

「でも糞もない……この話は終わりだ良いなあ。」

リエルは、フェイの言葉に黙った。

「君達も、今日は泊まって行きなさい。」

『分かりました。』

シズナ達は、フェイの言葉に甘えて泊まらせて貰った。

翌日、シズナとシンとヒジリはフェイさんに御礼を言って居た。

『フェイさん、泊まらせて貰いありがとうございます。』

「別に良いよ。」

「それにしても、リエル君来ませんね。」

「あの、馬鹿弟子が……。」

「まあ、最後に挨拶したかったけどなあ。」

『そうだな。』

「それじゃあ、フェイさん俺達も行きますね。」

「ああ、気を付けて。」

シズナ達は、フェイさんのお店を後にして大船に向かった。

大船に着いた、シズナ達は出航準備を済ませて大船を動かしメリエ  
ル島を後にした。



「やっぱり、コック見つからなかったなあ。」

「そうですね。」

『お腹減ったから、厨房で何か作って来るよ。』

「よろしく。」

シズナが、大船の中にある厨房に向かおうとした時……

「皆さん、昼ご飯が出来ましたよ。」

『「リエル／君。』」「』

『何故、君が此処にしかも厨房で料理を作って居たんだい？』

「それに君、フェイさんに駄目て言われて居たんじゃ。」

「実は、皆さんが眠って居た明朝にフェイ師匠にもう一度シズナさん達と旅をさせて下さいと頼んだです。」

明朝のフエイの食堂

「師匠、お願いしますどうかシズナさん達と旅をさせて下さい。」

「だから、まだお前は弱いから駄目だって言ってるだろう。」

「なら、僕此处を止めて自分で旅をします。」

「お前今何を言ったか分かって居るんだろな。」

「はい、自分が言った事は曲げません。」

「チツ、好きにしなこの馬鹿弟子が……。」

「師匠……。」

「ただし、無茶をしない事と何時でも帰って来な此处はお前の家でも在るんだからなあ!!」

「はい、フエイ師匠……今までありがとうございました。」

「と、言う事です。」

「そうか。」

『リエル、私達は今は賞金稼ぎだけど後四年後は海賊になるそれでも良いか。』

「はい、覚悟は出来て居ます。」

「リエル君、この船に乗ったのだから戦闘が起きた時自分も参加するからその時は自分の命は自分で守るんだよ。」

「分かりました。」

『なら、今日は新しくリエルが入るから宴だ。』

此処に、シズナ達の仲間がふえた。

## 第十九章（後書き）

オリキャラが、シズナ達の仲間になりました。

## 第二十章（前書き）

更新です。

## 第二十章

メリエル島を出て4日目シズナ達は、次の島ウエリヤ島に向かって居た。

『そろそろ、また海賊捕まえないとなあ。』

「そうだなあ。」

「まあ、東の海は海賊少いからなあ。」

『確かに、今頃エースとサボとルフィはちゃんと修業してるかなあ。』

「あの、シズナさん達は異世界から転生して来たんですよね。」

「ああ、それがどうかしたかりエル。」

「実は、僕も皆さんとは違う異世界から転生して来たんです。」

『何処の世界から、転生したんだい。』

「えーと、錬金術が使えて国家錬金術師が居る世界です。」

「ああ、鋼の錬金術師の世界かあ。」

「鋼の錬金術師、皆さんは僕が居た世界をそんな名前で呼んで居たんですね。」

『ああ、リエルお前も錬金術使えるのかあ。』

「はい、手を合わせての奴と錬丹術も軽やかじって居る程度ですが使えます。」

『手を合わせてやる奴が出来ると言う事は真理を見たのかい。』

「はい、この海賊の世界に転生する前に真理に錬金術の世界での思い出を代価に使える様になりました。」

「……………そうか。」

『まあ、取り敢えず次の島ウェリヤ島で凄い航海士が居たら仲間にしたいなあ。』

シズナは、そう呟き次の島ウェリヤ島に向かって居た。

## 第二十章（後書き）

次の話で、またオリキャラが仲間になりますしかも航海士です。



## 第二十一章（前書き）

久し振りの更新です。

## 第二十一章

シズナ達は、到着点のウエリヤ島に到着した。

『やつと、ウエリヤ島に到着した。』

「それにしても、人が誰もいませんね。」

「いや、人の気配は感じるぜえ。」

「とう言う事は？」

『海賊に支配されて居る見たいだなあ。』

「そう言えば、この島確かフェルドラ海賊団の拠点だった筈……。」

『また、分からない海賊団が出たなあ。』

「まあ、とにかく僕達はフェルドラ海賊団を倒せば良いだけ何です  
から。」

「そうだな。」

『なら、行くぞ野郎共。』

「」「」おつ。「」「」

と、シズナ達はフェルドラ海賊団が居る場所に向かおうとしたその  
時……

「ちょっと、待ちなさい。」

『何ですか、貴方？』

「貴方達、フェルドラ海賊団の所に行くわけ。」

「そうですが……。」

「余所者が、私達の村の事情に首をツクまないでよ。」

「と、言われなくても……。」

『私達、賞金稼ぎですので貴方の言う事を聞けませんね。』

「お願いよ、この島から出てよ。」

『貴方、海に出てみませんか。』

「え。」

『私は、貴方に聞いて居ますもし宜しければ私達と海を旅してみませんか。』

「無理よ、私がこの島を出たら村の皆が殺されるわ。」

「もしかして、君航海士かい。」

「ええ、私は航海士よ。」

『なら、尚更私達と一緒に旅に出ましよう。』

「どうして、そこまで私に構うわけ。」

『そうですね、私達の船には臨時の航海士は居ますがちゃんとした航海士が居ないので貴方に航海士をして欲しいのです。』

「……………分かりました、この村を助けて下さい。」

『……………当たり前です。』

「貴方の名前は？」

「私は、ミリア・ナエルです。」

『なら、ミリアそこで待つて居て下さい貴方を悲しませる糞海賊団を倒して来ますのでね。』

「……………はい。」

そして、シズナ達は今度こそフェルドラ海賊団の所に向かった。

## 第二十一章（後書き）

次の話で、シズナ達はフェルドラ海賊団と戦闘を行います。

## 第二十二章（前書き）

更新です。

## 第二十二章

シズナ達は、フェルドラ海賊アジト

『野郎共、行くぞ。』

「「「おう／はい……。」「」」

『唸れ烈風大気の刃よ、切り刻めタービュランス。』

シズナは、タービュランスを詠唱しフェルドラ海賊団のアジトを囲む壁を壊した。

『フェルドラ海賊団船長竜氷のフェルってのどいつですか。』

「誰だ、テメツー!!」

『私達は、賞金稼ぎです。』

「その、賞金稼ぎが俺に何の用だ。」

シズナは、竜氷のフェルが居る場所に向かい……………

ドゴオン

「「「うわあああ、フェル船長」「」」

「テメツ、何のつもりだ。」

『貴方を倒して、ミリアを私の船の航海士にする為です。』

「「「貴様、何を血迷ったことを……。」」」

「雑魚は、ひっ込んでいろ。」

ヒジリは、シズナに向かって行こうとしたフェル海賊団の下っ端共を白蘭と黒蘭で切り刻んだ。

「はあ、お前は相変わらず変わらないなあ。」

『別に、私は負けない事はお前やシンが良く分かって居るんですから。』

「何言って居る、俺が言いたいのは獲物を独り占めすると言っ事だ。」

『そう言っ事。』

「そつだよ、シズナ僕やリエルの分まで取るなよ。」

『そつだな、じゃあ先にリエルお前から行きな。』

「良いんですか、シズナさん。」

『ああ、お前の実力を私達に見せてみなさい。』

「分かりました。」

「なら、こっちからはサイ行け。」



「分かったぜえ、ボス。」

「では、始めましょう／＼か」

リエルとフェル海賊団幹部サイの戦いが始まった。

## 第二十二章（後書き）

次の話は、戦闘の話です。

## 第二十三章（前書き）

久し振りの更新です。

## 第二十三章

「戦う前に、一つ良いですか？」

「何だ。」

「貴方の通り名は何ですか。」

「俺の通り名は、冷刀のサイだ。」

「そうですか。」

「質問はもう良いな。」

「ええ、良いですよ。」

「なら、行かせて貰う。」

サイは、愛刀の刀を抜きリエルに向かって行ったが……

「チツ。」

それを、リエルは軽々避けてパツンと音を鳴らし両手を合わせて地面に両手を置いたら……

ズツガガガガガ！！

「なあ！？」

サイは、慌ててそれを避けた。

「お前、能力者か。」

「いえ、僕は能力者ではありませんよ。」

「なら何で、地面に両手を置いたら地面から尖った塊が現れるんだ。」

「そんな事、捕まる貴方には関係ないでしょう。」

リエルは、喋って居る内にまた地面に両手を合わせてを大きな握り拳にした地面の塊をサイに食らわした。

「ぐわっあああああ。」

ドサツドサツ

「ふう、以外に疲れましたね。」

うわぁ、サイさんがやられた。

フェル海賊団の下っ端がざわつき始めたが……

「黙れ。」

竜氷のフェルが、下っ端達に怒鳴った。

『こちらは、勝ちましたそちらは次はどなたですか。』

「リュウリ、次こそは勝つてよ。」

「分かって居るよ。」

『ならこちらは、ヒジリ行くか?』

「ああ、俺が行く。」

ヒジリは、愛刀の双刀白蘭と黒蘭を両手に持ち相手リュウリと相対した。

## 第二十三章（後書き）

次は、ヒジリの戦闘の話です。

## 第二十四章（前書き）

更新遅れてすいません、第二十四章更新です。



## 第二十四章

ヒジリは、相対している相手リュウリに二つ名を聞いた。

「あんた、二つ名はあるのか。」

「ああ、俺の二つ名は高速剣のリユウリだ。」

リユウリは、愛刀の刀を抜いてそう言いヒジリに向かって来た。

ガキツンガキツンガキツンガキツンガキツンガキ  
ツンガキツンガキツン!!

「やるな、あんた。」

「貴様こそ。」

ヒジリは、愛刀白蘭と黒蘭を斜めに構えそして……。

「二刀流：雙龍一閃。」

ヒジリは、そう言い白蘭と黒蘭を振り抜き白蘭と黒蘭から出た斬撃を出しリュウリに向かわせたが……………

「一刀流：烈火一閃！」

リュウリも、愛刀からヒジリと同じく斬撃を出した。

「チツ、やつぱり駄目か。」

ヒジリは、煙りが立ち込めて居る場所を見て言った。

そこには、多少怪我をしたリュウリが居た。

「中々やるな、そろそろお互いの一番の技で決着を付けよじゃないか。」

「ああ、分かった。」

そして、二人は愛刀の刀をまた構え……………。

「二刀流：雷豹二閃。」

「一刀流：龍一閃。」

二人の刀から出た、斬撃は……………。

バタッ

「俺の勝ちだ。」

ヒジリの勝ちで、終わった。

## 第二十四章（後書き）

次は、シンの戦闘話を更新します。

## 第二十五章（前書き）

すいません、更新遅れました。

## 第二十五章

シンは、ヒジリとバットンタッチをした瞬間フェルドラ海賊団の副船長のリフィルと戦闘になった。

「いきなり、攻撃ですか。」

シンは、リフィルの攻撃を避けながらリフィルに文句を言った。

「あら、私は女何だからレディーファーストと言う事にして居てよ。」

「まあ、そう言う事にします。」

「あら、貴方敵なのに優しいのね。」

「貴女こそ。」

「まあ、良いわこれからは能力を使って貴方を思い切り苦しめて上げるわ。」

「やれる物なら。」

「なら行くわよ、ソード・オーシャン。」

「もしかして、悪魔の能力者ですか？」

「そうよ、私は自然系悪魔の実ウミウミの実を食べた海人間よ。」

「マジですか、ならこちらは雷遁・雷狼の術。」

シンは、リフィルに向かって雷遁オリジナル技を使ったが……………

……

「こんな物、避ければ言い話よ。」

「なら、これは避けれるかな桜花衝。」

シンは、瞬身の術を使いリフィルに向かって行き右拳にチャクラを集めてリフィルに叩き合ってよとしたがまた……………

バッシャン

「チツ」

シンは、舌打ちを少し苛立ち初めて居た。

「あら、もう終わりなら今度は私から行くわよ。」

「ニードル・オーシャン。」

リフィルは、シンに向かって海で出来た大きな刺をシンに向かわせた。

シンは、それを少し避け切れなくかすり傷を負った。

「中々強いけど、今度こそ終わりにしますよ。」

「貴方に出来るかしら？」

シンは、リフィルに向かって突進しながら走って来てリフィルにあるクナイを投げたがリフィルはそれをあっさりとそれを避けたと思っただけ……

「桜花衝（Ver・武装色の覇気）。」

シンが、リフィルに投げたクナイは飛雷神の術が刻まれて居る特殊なクナイでそれを使ってリフィルがそれを避ける事を予測をしリフィルの背後に飛雷神で飛び今度こそリフィルに攻撃を食らわす事に成功した。

「中々強敵でしたよ。」

シンは、そう呟きシズナ達の所に戻って居た。

そして、次はいよいよ最後シズナの戦いである。

## 第二十五章（後書き）

次は、いよいよシズナの戦いです。

それが終わったらいよいよ原作開始です。

楽しみに待って居て下さい！！



## 第二十六章（前書き）

戦闘描写難しいですね。

## 第二十六章

竜氷のフェルとシズナは、相対している。

『やつと、貴方と戦えますね竜氷のフェル。』

「ほざくな、小僧。」

『まあ、とにかくやりましょうか。』

シズナは、そう言ってフェルに攻撃を仕掛けた。

『嵐脚・風神。』

シズナは、フェルに向かって身体強化Ver・嵐脚から斬撃を繰り出した。

「ふつ、そんな物避ければ良い話だ。」

『避けきられるのは、計算の内ですよ。』

シズナは、六式身体強化Ver・の一つ剎・風雷光でフェルが居る場所まで来た。

「チッ、いつの間に。」

『嵐脚・風神を、出した時ですよ。』

シズナが、そう言った時フェルはシズナから離れようとしたが………

『遅い、剃・風雷光 & a m p ; 指銃・風雷神。』

シズナは、フェルの懷に剃・風雷光で潜り混んで指銃・風雷神をフェルに食らわした。

「ぐふっ!？」

シズナは、一旦フェルから距離を取った。

『死んだか?』

シズナが、そう呟いたが……

「はあはあ、小僧中々やるな。」

『あんたこそ、あれを食らって耐えて居るのは凄いと思うよ。』

「そうか、そろそろ俺も本家を出すとするか。」

フェルは、シズナにそう言い……。

「V e r・龍氷人。」

フェルは、自分の悪魔の実の能力の一つに変身した。

『それが、貴方の能力ですか。』

「そうだ、俺は動物系悪魔の実リュウリュウの実モデル龍氷の実を食った竜氷人間だ。」

『……………竜氷人間ですか。』

「そうだ、そして今から貴様に攻撃を当ててやるよ。」

フェルは、そう言い一瞬で消えた。

『なっ!?!』

フェルは、先程シズナが使って居た六式の一つ剃でシズナの懷に潜り混んだ。

「アイス・ドラナックル。」

『ぐふっ!?!』

シズナは、驚いた余りフェルからの攻撃を食らってしまった。

『まさか、貴方……………。』

「お前が、考えて居る通りお前が先使って居た移動技の劣化版だ。」

『まさか、先私が使ったのを見て剃を使える様になるなんて。』

「小僧に、褒められるとはな。」

二人は、そう言いまたお互いぶつかり合った。

はあはあはあはあはあ

二人が、お互いにぶつかり合って約3時間が経った。

『そろそろ、決着を付けましょう。』

「そうだな。」

二人は、距離を取ってお互いの最後の技で決着を付ける事にした。

「行くぞ。」

「ドラゴニックス・ナックル。」

『六式奥義身体強化Ver・六王銃・光雷。』

ドサッ！！

『あんたは、強かったよ。』

フェルを、倒しシズナは勝利した。

『さて、皆ミリアの所に行きますよ。』

「「「はい／おお／分かりました。」「」」

シズナ達は、ミリアと村人達にフェルドラ海賊団を倒した事を話に行きそれを聞いた村人とミリアは喜び宴を開いた。

宴から、二日後シズナ達は船に乗り込んで居た勿論ミリアも一緒に。

『村長さん、お世話になりました。』

「いえいえ、こちらこそ私達を助けて貰いありがとうございます。」

『いいえ、私達は当たり前の事をしたまでですから。』

「そうですか、それとミリアを宜しくお願いします。貴方達が海賊になっても貴方達なら私達は応援出来そうです。」

『そうですか。』

シズナは、そう言い村長さんと別れてミリアに話し掛けた。

『ミリア、そろそろ出航しますから村人の皆さんに何か言う事はありませんか？』

シズナが、そう言ってミリアに聞いた。

「そうね、皆今まで迷惑掛けてごめんなさい。」

「「気にするな、あれは仕方なかったんだ。」」

「それでも、私は皆に何も返せなかったから……。」

「ミリアよ、そなたは今まで儂ら村人の為に頑張って来たんだからもう自分の夢を追いかけなさい。儂らの望みはそなたの夢が叶う事だから。」

それを、聞いたミリアは……

「あゝりがとう、みんな。」

泣いた。

『さあ、ミリア行こう。』

「うん。」

ミリアは、シズナに連れられて船に乗り込んだ。

「みんな、今までありがとう。そして行って来ます。」

ミリアは、村人達に挨拶をしてシズナ達と一緒に旅に出た。



## 第二十六章（後書き）

次は、いよいよ原作開始ですがその前にクリスマスマス企画を更新しますので楽しみに待って居て下さい。

## クリスマス企画対談話（前書き）

お待たせしました、クリスマス企画対談話です。

## クリスマス企画対談話

？

？

### クリスマス企画

「こんにちは、作者多摩です。今回はクリスマスという事で私と私  
が書いて居る小説の主人公二人に来て貰いました。では登場して貰  
いましょうどうぞ。」

「どうも。」

「こんにちは！！」

「今回の、クリスマス企画対談でONE PIECE 転生最強小説  
の主人公モンキー・D・シズナさんとしても、あの時ワンピースの  
世界じゃなくNARUTOの世界で主人公のナルトに成り代わった  
らのうずまきシズナさんお二人に来て貰いました。」

「初めまして、紹介にもありましたモンキー・D・シズナです。」

「こちらこそ、初めましてうずまきシズナです。」

「今回、お二人に来て貰ったのは今日がクリスマスなので私作者多  
摩とお二人と対談企画をする事にしました。」

「対談をするのは、良いけど何を話すですか？」

「それに付いては、考えていますから大丈夫です。」

「それなら、良いけど……。」

「それでは、お二人に質問です。恋人は居ますか？」

「居ますよ、私の場合とっても可愛い恋人が居ます。」

「私も、居ますよとっても恥ずかしがりあさんで女帝で七武海をしていますよ。」

「ちよつと、そこ何ネタバレ見たいな事言つて居るんですか。」

「多摩が、恋人が居ますかて言うから言つたまでですが？」

「ハア、分かりましたよ。（この天然野郎が……）じゃあ、次の質問今最も誰と戦いたいですか？」

「うゝんそうだな、私は父・四代目火影と自来也さんと水黒双刻と戦いたいですね。」

「私は、赤髪のシャンクスと冥王と白髭と黒髭と爺ちゃんだな。」

「そうですか、そんなお二人から大物の名前が聞けて嬉しいのです。では次の質問兄弟は居ますか？」

「居るよ、とっても可愛くて自分の忍道を信じて仲間思いな妹が居ますよちよつとブラコンな所がたまに傷ですけど。」

「私も、居ますよ笑顔が似合つて太陽見たいで仲間思いで天然で可愛い妹と常識人の義弟と誰よりも優しく頑固な一面がある義弟が居るよ。」

「そうですか、では次の質問貴方達の夢は何ですか？」

「私の、夢はグランドラインの海を仲間達と渡り着る事と妹の夢である海賊王にする事だな。」

「私の場合は、忍世界の平和と恋人と結婚して子供と孫に囲まれて幸せに暮らす事と妹に本来の主人公ナルトの夢である火影になって貰う事だな。」

「では、そろそろ御開きの時間が着そうなので最後の質問です。転生して良かったですか？」

「そうですね、確かに航海は危険と隣り合わせだけど仲間が出来たりまた強者と戦う事があるから私は転生して良かったと思って居るよ。」

「私は、そうですね最初は何で自分だけこんな思いをしないと行けないのかと思いましたけど里を抜けて色んな人や師匠達と出会い最愛の人や同じく転生した親友や仲間達のお陰で今は転生して良かったと心からそう思えるよ。」

「そうですか、今回は忙しい中来て貰いありがとうございます。」

「いえ、こちらこそ読んで貰いありがとうございます。」

「そうですよ、私はもう一人の自分と会話が出来て嬉しかったですから。」

「そう言われると嬉しいです。これから頑張って2作品を頑張っ

て完結出来る様に頑張っ  
て行きたいと思ひます。こ  
れからも応援よろしくお願  
ひします！」

## クリスマス企画対談話（後書き）

次は、原作に介入しますので楽しみにして居て下さい。

## 第二十七章（前書き）

明けましておめでとございますー！！

今年初の、更新です。

今年も、多摩の小説をよろしく願います。



## 第二十七章

シズナが旅に出てあれから、4年が経った。

シズナ達は、この4年の間で色々な島に行つては悪事を働く海賊を捕まえては海軍支部がある島に行きその海軍の人に渡して賞金を貰つて居た。

『暇だな。』

「そうだね。」

シズナとシンは、日が当たる場所でパラソルを開いて置き椅子に座りながらボケつとして居た。

そんな時、ニュースクーが新聞を運んで来た。

『お、ありがとうな。』

シズナは、ニュースクーにお金を渡して新聞を読み始めた。

『おお！！』

「どうした、シズナ？」

『ああ、皆にも見て欲しいからヒジリ達が居る場所に行くよ。』

シズナとシンは、ヒジリ達が居る場所に向かった。

『おい、ヒジリ。』

「どうした、シズナ？」

『新聞に入って居た指名手配の紙にルフィの紙が合ったんだよ。』

「マジかよ。」

「と、言う事は？」

『ああ、原作は始まって居てルフィ達は今〃始まりと終りの町〃ローグタウンに向かって居る筈だ。』

「て、事はローグタウンに向かえば良いのねシズナ。」

『ああ、そつだミリア頼むぜ。』

「分かってますよ。」

シズナ達は、船をローグタウンの方に向けローグタウンに向かった。

## 第二十七章（後書き）

次回は、シズナが久し振りにルフィと会います。

## 第二十八章（前書き）

ドラゴンの喋り方難しいですね。

## 第二十八章

シズナ達は、ローグタウンに着いた。

『さて、私はちょっと知り合いに会って来るよ。』

それを聞いた、ヒジリとシンはシズナが会いに行く人が分かり……

「「気を付けて行けよ。」」

『ありがとうなあ。』

ヒジリとシンの、言葉を聞いてシズナは知り合いの所に向かった。

「あの、ヒジリさんシズナさんは誰に会いに行っただんですか。」

「うん？ああ、シズナは父親に会いに行っただんだ。」

「父親？シズナさんの父親で誰何ですか。」

「シズナの父親は、モンキー・D・ドラゴンで革命家だ。」

「「ええ……あの革命家のモンキー・D・ドラゴンですか。」」

「ああ、そしてシズナの祖父は海軍本部中将で拳骨のガープと呼ばれて居るモンキー・D・ガープだ。」

「「何か／て言うか、シズナさんはある意味サラブレッド何ですね。」」

「まあ、そうだな俺もそろそろ刀専用の手入れする奴買いに行くからお前達も何か買いに行けよ。」

「分かりました、集合場所はどうします？」

「そうだな、船にしようその方がシズナとシンも来るだろうしな。」

「分かりました、では僕は食料を買いに行きます。」

「じゃあ、私は服と海図を書く紙を買いに行くわ。」

三人は、船で待ち合わせする事を確認しそれぞれ買い物に向かった。

その頃、シズナは？

『久し振りだね、親父。』

「……シズナか。」

父モンキー・D・ドラゴンと会って居た。

『ルフィにでも、見に来たの。』

「まあ、そつだ。」

『ふ〜ん、まあ私が鍛えたんだルフィは強いよ。』

「そつか、だがあれは何だ？」

父ドラゴンが指を指した方を見ると……そこには処刑台の上に道化のバギーによって殺されようとしていた。

『…………、大丈夫私が助けるし。』

「どうやってだ？」

『こつやって、雷雲よ我が刃となって敵を貫けサンダーブレード！』

シズナは、バギーによって処刑台の上で殺されそうになって居たルフィを間一髪のを助けた。

「シズナ、お前の力を革命軍に欲しいな。」

『残念だね、親父私はルフィを海賊王にしたいから無理だし彼女に怒られるから仲間にも怒られるからさあ。』

「そつかルフィを、海賊王にするかそれにしてもお前に彼女が居るとは俺は驚いたよ。」

『まあ、彼女は強いからね。』

「そうか、そろそろ俺は行く。」

『分かった、いつかまた会おう親父。』

シズナの言葉に、ドラゴンは後ろに向きながら手を振り風に溶け込み消えた。

『さて、ルフィ達を助けに行きますか。』

シズナは、スモーカーからルフィ達を助ける為ルフィ達が現われる場所に待ち伏せする事にした。



## 第二十八章（後書き）

次回は、シズナがスモーカーの魔の手からルフィを助けます。

## 第二十九章（前書き）

すいません、遅れました。

## 第二十九章

シズナは、急いで居た。

『ヤバいな、幾らルフィが覇気を使えて強くなったからてまだスモーカーには勝ってないよな。それにあの子私との約束でグランドラインに入ってから覇気を使う様にて言っただけだからな。』

シズナは、見聞色の覇気を使ってルフィが居る場所を探した……

その頃、シズナがルフィを探して居る時ルフィは処刑台からサンジとゾロと一緒に逃げて居たがゾロがたしぎの相手をして先に船に向かつて居た時スモーカーが待ち伏せをして居た……

「来たな、麦わらのルフィ。」

「アンタ誰だ!!」

「俺の名はスモーカー」海軍本部「の大佐だ、お前を海へは行かせねえ!!!」

「うわっ、何だ何だ何だ!？」

「ルフィ、てめえ……。」

「!」

「このバケモノがア!!!」

サンジは、スモーカーに蹴りを食らわした……が

「ギロ……」

「い！？」

「ザコに用はねエ。」

「！……」

「＼ホワイト・ブロー＼！！」

「うわぁ」

「サンジ、んニャロ……ゴムゴムの銃……」

「ん？」

「お前が、3千万ベリィだと……」

「！……」

「うわっ、うべっ……」

「フン悪運尽きたな……」

スモーカーが、そう言ったその時……

「それは、どうかなタービュランス。」

スモーカーは、いきなり突風によって捕まえて居たルフィから放されて後ろに後退した

「誰だ、てめえ。」

「私か？」

「てめえ、以外誰が居るんだ。」

「私はモンキー・D・シズナ、そこに居るモンキー・D・ルフィの兄だ。」

「そうか、てめえが今巷の有名な賞金稼ぎの森羅万象のシズナか。」

「まあ、そうだな。」

「だが、お前は賞金稼ぎで麦わらは海賊だ何故助ける？」

「決まっているだろう、兄妹だからと賞金稼ぎは昨日まで今日からはジラソーレ海賊団の船長だ。」

「海賊なら、捕まえるだけだ。」

「いや、無理だね。」

「何？」

「今から、この二人を連れて逃げるからね。」

シズナは、そう言い気絶しているルフィとサンジを両脇に抱え込ん

で詠唱破棄でイグニートプリズンを発動し水蒸気を起こさせてスモーカーからの視覚を遮って何とか逃げきた

「糞、逃げられたかお前達麦わらを追うぞ船を出せ。」

「え！？追うって」

「グランドラインへ入る。」

「え！？」

「行きましょう、私も行きます！！」

「たしぎ曹長！！」

「ですが、大佐この町は大佐の管轄で……！！上官が何と言うか……。」

「「俺に指図するな」とそう言っとけ！！」

その頃、シズナは……

『あれが、ルフィの船か。』

シズナは、ルフィとサンジを両脇に抱え込みながらメリー号に近付いた

「ルフィ・サンジ！！」

ウソップは、そう叫びメリー号から降りてシズナに近寄った……

「おい、ルフィ・サンジ大丈夫か。」

「貴方は、誰何でルフィとサンジ君を抱え込んで居るの？」

『ああ、自己紹介がまだだったね私はモンキー・D・シズナでルフィの兄です。』

「え、あの森羅万象のシズナがルフィの兄貴!!」

ウソップは、そう呟いた

『まあ、私は仲間と此処に食料や色々な物を買って来て居てね私はちよつとある人と会いに行った帰りにルフィとその金髪君がスモーカーに捕まって居たから助けたんだよ。』

「そうだったの、ありがとうルフィのお兄さん。」

『御礼は、良いそれから私の事はシズナと呼んでくれ。』

「そ、分かったわシズナさん。」

『そろそろ、私も仲間の所に帰るよルフィにグランドラインに入った所で会おうと言つていてくれ。』

「分かった。」

『それじゃあ。』

シズナは、そう言いヒジリ達が待つて居る船に向かった。





## 第二十九章（後書き）

次は、グランドラインに入ってシズナ達とルフィ達の会話話です。

## バレンタインデー企画対談話（前書き）

ユフィの彼氏をフェイトから小太郎に変えたので新しく更新しました。

## バレンタインデー企画対談話

「今晚、作者多摩です今日はバレンタインデーなので私が書いて居る小説の主人公の嫁さんとただ一人の女主人公の皆さんを呼びました。」

「妾は、ワンピース転生最強小説の主人公のモンキー・D・シズナの彼女のボア・ハンコックじゃ。」

「私は、〽NARUTO最強転生〽九尾の申し子の主人公のうずまきシズナさん嫁のうずまき白です。」

「私は、魔法先生ネギまTS成り代わり小説の女主人公で犬上小太郎の彼女のユフィエル・スプリングフィールドです。」

「今日皆さんを読んだのは、旦那さんや彼氏をどう思って居るかを聴きだいたいと思い皆さんを呼びました。」

「なら最初は、妾からじゃの。」

「分かりました、ハンコックさんから見たシズナはどんな存在ですか？」

「そうじゃの、妾から見たシズナは優しいくて・兄妹思いや仲間思いで妾が嫉妬するぐらいに仲が良いのじゃまあ妾が一番じゃがのう。」

「そうですね、ハンコックさんありがとうございます。次は白さんあなたにとってシズナ君はどんな存在ですか？」

「私から見たシズナさんは、ハンコックさんと同じく妹のルナちゃんに優しく仲間思いで子供達から見ても頼れるお父さんで勿論僕にも優しいですよ。」

「はい、分かりました白さんありがとうございます。次はユフィエルさんどうぞ。」

「私から見た、小太郎は面白くて優しくて強くてツンデレで犬耳が可愛くてさわれるのは私だけで誰にでも優しいのが彼の良い所です。」

「そうですか、最後に小説を読んで貰って居る皆さんに一言お願いします。」

「「「これからも、私・妾・僕達の活躍を楽しみにしてして下さい。」」」

「これで、バレンタインデー企画を終わります次はホワイトデー企画で男子の皆さんに来て貰います。」

それでは、皆さんまた会いましょう!!

## バレンタインデー企画対談話（後書き）

すみせん、少し書き直しました。

## キャラ紹介2（前書き）

すみません、キャラの二つ名を書くの忘れていましたので追加しました。

## キャラ紹介2

名前 リエル

身長 172CM

体重 56kg

### 容姿

白銀色の髪ねミドルヘヤーで、瞳の色は蒼色で顔立ちはネギまのナギ・スプリングフィールド似です

### 特殊能力

錬金術&amp;錬丹術（勿論、手合わせ錬成）

四式（剃・嵐脚・鉄塊・指銃）が使える。（勿論、シズナから教わった）

武装色の覇気と見聞色の覇気

### 設定

リエルは、元はハガレンの世界で凄腕の錬金術師で錬丹術も多少使える。ワンピースの世界に転生してからは元ロジャー海賊団のコックをして居たフェイから料理を教えて貰って居たがシズナ達と出会いシズナ達と旅をする為にフェイにシズナ達と旅をしたいと言いフェイからはまだ駄目と言われて居たがリエルは自分の頑固たる決意をフェイに言いフェイから了承を貰いシズナ達と旅をしている。

二つ名

造形のリエル

理由

錬金術で、相手を倒すから

名前 ミリア・ナエル

身長 169CM

体重 内緒（笑い）

容姿

朱金色の髪のロングで、瞳の色はオレンジ色で顔立ちはNARUTOの日向ヒナタ似です

特殊能力

四式（紙絵・月歩・鉄塊・嵐脚）リエルと違うが同じくシズナから教えて貰い四式は使える用になった

天性の天候読み（天候をナミ並みに読める）

武装色の覇気と見聞色の覇気

トキトキの実の能力者（シズナ達と旅を始めて少し経った時にある島で拾った実がトキトキの実で調べてみたら超人系の悪魔の実でシズナ達みたいにチートな能力者に慣れると思い食べた！！名前の通り時を操るので時を停めて自分の攻撃を相手に喰らわせる事が出来るが……持続時間が、30秒しか今の所停める事が出来ないが修業



をすれば持続時間が増える)

設定

シズナ達に、助けられまで海図などを書かされて居たがシズナ達によって海賊達を倒したので島のみんなから自分の人生を大切にしろと言われてシズナ達の仲間になり船の航海士をしている!!

二つ名

時術師のミリア

理由

トキトキの能力で、時を停めて相手を倒すから

## キャラ紹介2（後書き）

今回は、ルフィ達とシズナ達と初会合でアニメオリジナルの話を書く予定です。

### 第三十章（前書き）

すいません、更新遅れました。

## 第三十章

シズナは、ルフィとサンジをナミ達に渡した後ヒジリ達が待つ船に戻った。

『すまん、みんな遅れた。』

「「「「シズナ／さん」」」」

シズナが、ヒジリ達にそう言っているとヒジリ達はいきなり帰って来たシズナにびっくりし声を出した。

「お前、もしかして父親に会った後ルフィを助けて来たのか？」

ヒジリが、シズナにそう聞くとシズナは……………

『まあ、ついでにルフィをあちらの船に居た仲間に渡して来た。』

「そうかよ、とにかくお前が帰って来たし早く出航の合図をしるよ船長？」

『ああ、野郎共出発するぞ！！』

「「「「オオオオオオ」」」」





「そう言えば、シズナさんからどうするんですか？」

船を出発させてから、30分ミリアがシズナにこれからどうするのか聞いて来た。

『そうだな、妹のルフィの仲間のナミとウソップにルフィにグランドラインに入る手前で会う約束したからな久し振りに会おうと言っ  
　　といてと言ったからそろそろ来ると思うんだけどな。』

シズナが、ミリアにそう言った時

「シズナ、彼処から船がこっちに向かって来てるけど。」

シンが、シズナにそう言うときシズナは紅月眼の能力の一つ白眼を使って此方に向かって来て居る船の旗を見て

『あれは、間違いなくルフィ達の船ミリア船をこちで停めてあの船を待つ事にした。』

「分かったわ。」

シズナが、ミリアにそう言うときミリアは分かったときシズナに船を停めルフィ達が来るのを待った。



それから、20分後ルフィ達はやっとシズナ達の船に追い付きルフィ達も船を停めてシズナ達の船に来た。

「シズナお兄ちゃん!!」

『久し振りだな、ルフィ大きくなったな。』

「むう、会って早々に身長の話言わないでよ。」

『ごめんごめん、それでルフィそこにいるのがお前の仲間か?』

シズナは、知って居るがわざと知らない振りをした。

「うんそうだよ、確かウソップとナミには会っただね。」

『ああ、お前とその金髪君をスモーカーから助けて船に居たウソップ君とナミさん達に渡したからな。』

「ふーん、そうなんだ。」

『それより、ルフィお前の仲間を私に紹介してくれるかい?』

「勿論、シズナお兄ちゃんも私が紹介したらシズナお兄ちゃんの仲間紹介してよ。」

『勿論だ。』

「分かった、じゃあまずは副船長兼剣士のゾロから。」

「ロロノア・ゾロだ、よろしく。」

「次は、航海士のナミね。」

「先程振りですね、シズナさん他の皆さん初めましてナミです。」

「次は、狙撃手のウソップ。」

「ナミと同じく先程振りですシズナさん他の皆さんは初めましてウソップと言います。」

「じゃあ次は、コックのサンジだな。」

「え〜と、助けて貰いありがとうルフィのお兄さん。」

「いや、こちは妹と君がヤバそうだったから助けたままだよ金髪君。」

「あの、お兄さん俺には金髪君と言う名前じゃなくてサンジと言う名前があるんですが。」

「分かったよ、後私の事はお兄さんじゃなくてシズナと呼んでくれ。」

「分かった、シズナさんと呼ばせて貰うよ。」

「じゃあ最後は、私だね私はシズナお兄ちゃんの妹のモンキー・D・ルフィです。」

「ルフィ達も自己紹介したし次は私達だな。」

「なら、最初は俺から行くよ。」

『分かったじゃあ最初は、ヒジリお前からだ。』

「初めましてだな、シズナの妹そしてその妹の仲間達俺は副船長兼剣士のキンミヤ・ヒジリだよろしくな。」

『よし、次はシンお前だ。』

「分かった、初めまして僕は船医のナヤマ・シンですよろしく。」

『次は、リエルだな。』

「僕は、コックのリエルですよろしくお願いしますね。」

『次は、ミリア。』

「この船の航海士のミリア・ナエルよ、よろしくね。」

『じゃあ最後は、私妹のモンキー・D・ルフィの兄でこの船の船長のモンキー・D・シズナです。』

「よし、シズナお兄ちゃんも自己紹介終わったし今日は久し振りに会ったから宴をしよう。」

『そうだな、リエル宴の料理頼むぜ。』

「なら、こっちからもサンジ一緒に手伝って来て。」

シズナとルフィが、それぞれの仲間のコックであるリエルとサンジ

にそう言つと

「「分かつた／よ！！」」

リエルとサンジは、一緒に宴の料理を作る為にキッチンに向かった。

それから、１時間後サンジとリエルは宴の料理を作り終えシズナ達を呼びシズナ達とルフィ達は宴を始めた。

### 第三十章（後書き）

次回も頑張ります。

## アンケート（前書き）

アンケートについては、感想受け付けか活動報告に書いて貰えれば幸いです。

## アンケート

こんばんは、作者の多摩です。

今日は、皆さんにアンケートを取らせて貰いたく此処に書かせて貰いました。

実は、私が書いて居るワンピースでグランドラインに入る前の原作アニメオリジナルの話を書くか書かないか皆さんにお伺いしたく此処に書かせて貰いました。

もし、書くなら？で

書かないなら、？で

どちらでも良いなら、？をお願いします。

後、遅くなりましたがシズナ達が乗って居る船の名前も出来れば名前を提供して貰えないでしょうか？

どうか、よろしくお願いします。

## 中間アンケート発表

こんにちは、多摩です。

えーと、今回はぜんかいのアンケートの中間発表をする事にしました。

ワンピースオリジナル話を書くが1票

ワンピースオリジナル話を書かないが0票

どちらでも良いと別にどうでも良いが0票です。

後、船の名前も応募がありました。

どちらも、まだまだ募集中なのでどんどん応募してくれたらとっても嬉しいです。後、そろそろ応募の締め切りをします。応募締め切りは3月18日金曜日の午後3時までですので早めに応募して下さい!!!



アンケートの結果発表!! (前書き)

アンケートを、締め切りました!!

## アンケートの結果発表！！

こんにちは、多摩です。

今回は、前回のワンピースアンケートの結果発表です。

では、結果発表を行います。

ワンピースオリジナル話を書くが、1票。

ワンピースオリジナル話を書かないが、0票。

どちらでも良い、またはどうでも良いが0票。

結果から、ワンピースオリジナル話を書く事に決定しました。

では、次シズナ達が乗って居る船の名前は那由他さんからの提供のヘルズ・ゲート・アタッカーズに決定しました！！

ポロピロさんも、名前の提供をされていましたが今回は残念という事にさせて貰います。

アンケートに、参加して貰いありがとうございます！！

次からは、オリジナル話を開始しますので楽しみにして居て下さい！！

## アンケートの結果発表！！（後書き）

次回からは、いよいよオリジナル話を開始です。

## 第三十一章（前書き）

ワンピースオリジナル話です!!

## 第三十一章

やあ、久しぶりモンキー・D・シズナだよ。

ルフィ達との会合の後一緒に大きな樽でグランドラインに行く前に進水式を一緒にした。

シズナとルフィ達がローグタウンを離れて2日経った。

「ねえねえ、シズナお兄ちゃんまだグランドラインに着かないの？」  
ルフィが、シズナにそう聞いて来た。

「あのなルフィ、まだローグタウンから離れて2日しか経っていな

いし昨日みたいな強風が吹けば早く着くかもしれないがこの風だと数日は掛かるからまあ楽しみにしている！！」

「分かった。」

ルフィは、シズナの言葉に頷き自分の特等席に向かった。

と、船のマスト上で周囲を見渡して居たウソップとヘルズ・ゲート・アタツカーズのマストのマスト上で同じく周囲を見渡して居たヒジリが声を張り上げて叫んだ！！

「「おい！！右舷の方向に鳥の大群が見えるぞ。」」

「鳥の大群？」

自分の特等席から、シズナが居る場所に戻って来たルフィがそう呟いた。

「あれは、小舟じゃないか？」

と、サンジがそう言った！！

『なら、私が見て来ましょう。』

シズナは、そう言い月歩を使い小舟に向かった。

小舟に着いたシズナは、鳥の大群を追い払い小舟の部屋に入った。  
そこには……………

『おいおい、女の子かよ！！しかもこの子オリジナル話で出てくる  
アピスだった筈？とにかくこの子を船に連れて行こう！！』

シズナは、女の子を<sup>アピス</sup>おんぶして月歩で船に戻って行った！！

?? 視点

あれ、此処何処だろ？もしかして、また海軍に捕まった！！

女の子が、そんな事を考えて居ると

ガツチャ

『お、起きたみたいだなシンに寄るとただの空腹みたいだからサンジ君にスープ作って貰ったから起きたら食べるかなと思ったから持って来たけど食べれるか？』

シズナが、部屋に入って来て右手にはお盆の上にスープが入った皿をベッドの近くのテーブルに置いて女の子にそう言った！！

?? 視点終了



### 三人称視点

シズナが、持って来たスープを飲んだ女の子は自分の事を話たいと言いシズナは女の子を皆が居るである場所に連れて行った！！

『それで、君の名前は何て言っただ？』

シズナは、女の子に自分の名前を聞いた。

「私の名前は、アピス！！お願いします、私の住んで居る島を助けて下さい。」

アピスが、そう言うとシズナがアピスに事情を聞いて来た。

『どうして君は、私達に自分の島を助けて欲しいだい？』

「えーと、実は私海軍から逃げて来たの。」

シズナの質問に、アピスがそう言うとゾロが……

「何で、お前は海軍から逃げて来たんだ？」

「……………」

ゾロの質問にアピスは黙り込んだ。

『ハア、分かったよアピス君を無事に島に私達が連れて行こう！！』

シズナが、そう言うとヒジリが……

「シズナの言う通り、俺達が島に連れて行くぜ。」

シズナとヒジリの言葉を聞いた他のメンバーやルフィ達も頷いた。

「ありがとう！！」

アピスは、シズナ達にお礼を言った！！

『まあ、行くのは良いがアピス君の住む島の名前何て言うんだ？』

と、シズナはアピスに聞いて来た。

「私、軍艦島から来たの。」

アピスは、そう言った。

「軍艦島、確か……」

ナミは、そう呟き自分の部屋にある海図を取りに行って帰って来た。

「合った、此处だわ!!」

ナミが、持って来た海図のある場所を指した。

『確かに、軍艦の形をしているな。』

シズナが、そう呟くと……

「よし、皆軍艦島に向かうぞ!!」

ルフィは、そう言った。

『そうだな、なら早速軍艦島に向かおう。』

シズナとルフィ達は、アピスの住む島軍艦島に船を向けて進めた!!

次回に続く!!

### 第三十一章（後書き）

しばらくは、オリジナル話です!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8325m/>

---

ONE PIECE転生最強小説

2011年5月4日01時45分発行